
第32話 代理告白

山中幸盛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第32話 代理告白

【Nコード】

N8144Z

【作者名】

山中幸盛

【あらすじ】

中学3年の名倉憲也の携帯に同級生の宇佐美桜から電話が入って呼び出される。宇佐美の親友の坂本牧子が憲也のことを好きだと伝えるのだが。

名倉憲也は中学三年生だ。夏休みに入ってももない金曜日の午後、自宅で寝転がって週刊漫画雑誌を読んでいると、携帯に見知らぬ番号から電話がかかってきた。

「名倉君？ B組の宇佐美桜だけど、いまヒマ？」

ガールフレンドいない歴十四年の憲也は驚いた。宇佐美桜はAKB48の大島優子に似ていて男子生徒に人気がある女の子だが、クラスも部活もちがうので一度も口をきいたことがない。どうして携帯の番号を知っているのだろうか？

「少年ジャンプを読んでいるんだけど」

「邪魔してごめんね。ちょっと話したいことがあるんだ。戸田川緑地の噴水池まで来てくれる？」

「今から？」

「何分で来られる？」

「自転車で飛ばせば五分かな」

「お願い。待ってるから」

もしかして、告白？ などと大いに期待しながら、でもそんなわけないわな、などと興奮する自分を抑えつつ、憲也は生まれて初めての体験に期待九パーセントで出かけて行った。残り十パーセントはもちろん保険だ。

宇佐美は憲也の顔を見ると近くのベンチに誘い、ベンチの片端に腰かけるなり唐突に言った。

「坂本牧子って覚えてるわよね」

「うん」

憲也とは一年のときに同じクラスで、父親が宮城県のどこかに転勤になったので三学期が終わると転校して行った女の子だ。芸人の山田花子と体型も顔も雰囲気も似ていたので一部の男子生徒から花ちゃんと呼ばれていた。東日本大震災の後、坂本を知っている誰も

が津波に遭ったとか遭わないとかと噂していたものだ。

「私、マコとは親友で、ずっとメールを交換していたの。それが、震災の後はぶつとり途絶えちゃって」

「やっぱり津波に遭ったんだ？」

「つい先ほど実家のおばあちゃんに電話で確かめてみたんだけど、まだ遺体も上がっていないんだって」

「そうか」

憲也は同情するが、それにしてもなぜ宇佐美が自分にそんな話をするのかがわからない。

「マコ、名倉君が大好きだったんだよ」

「へ？」

と、思いがけない展開に、憲也は間抜けな声を発した。

「体育大会の時に、名倉君がマコに何気なく優しくしたことがあったでしょ」

「体育大会？ オレ、何かしたっけ？」

「恋は盲目、蓼食う虫も好き好き。マコにとって名倉君はタイプで、初恋だったの。だから体操マットを運んでいたときにちょっと手伝ってもらっただけで恋に落ちちゃったわけ。でね、名倉君のために一生懸命ダイエットしてね、背も十センチ以上高くなって、髪の毛を伸ばして小顔になったから写真を見た限りでは今はまったくの別人よ。それに高校は名古屋の高校を受験しておばあちゃんの家から通うつもりだったんだよ。名倉君の携帯の番号とか志望校を調べろってしつこかったんだから。勉強が大嫌いだったのに、成績もずいぶん上がったみたいだよ、恋の力は偉大だね」

憲也は戸惑いを隠せなかった。女の子に好かれたことなんか一度もないし、ましてや相手が死んでいるかもしれないのでどう返事していいかわからない。それにしてもなぜ今頃になってそんな話を聞かせるんだろ。憲也が首を傾げていると、しばらく黙り込んでいた宇佐美がおもむろに口を開いた。

「マコ、まだこの世に未練があるみたいなんだ。名倉君に自分の思

いを伝えてからじゃないと、どうしても天国に行けないみたい」

「はあ？」

憲也が再び間の抜けた顔を見ると、宇佐美は憲也の顔を見据えて淡々と説明した。

「昨日の夜からおかしなことがばかり起きているの。部屋の蛍光灯が突然消えたり、机の上の物がバサツと落ちたり、私の部屋は二階なんだけど、窓の外で何かが一瞬横切ったような気がしたり。決定的だったのは、今からちょうど一時間くらい前なんだけど、アルバムにはさんであったはずの写真が三枚机の上に並べてあったの。ぜんぶ、名倉君が写っている写真なのよ」

憲也は背筋がゾツとした。

「だから、マコが、名倉君にマコの気持ちを私から伝えて欲しいって言っているような気がして、電話したの」

「まさか」

「きつと近くから私たちのことを見ているはずよ」

「そんなばかな話」

と言いながら顔を動かすと、目の前に一人の女の子が立っている。宇佐美が目をまん丸に見開いて叫んだ。

「マコ！」

女の子は悲しげに微笑み、右手を胸の前まで持ち上げてサヨウナラと手を振ると、スウィーツと透明になって消えた。山田花子とは似ても似つかぬ、松下奈緒に似たスタイル抜群の女の子だった。嗚呼、もつたいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8144z/>

第32話 代理告白

2011年12月25日23時52分発行